

# 『徒然草』の連語「覚えし」と文体

安部 清哉・川澄 香奈

〔キーワード：①『徒然草』 ②「覚えし」 ③文体 ④擬古文 ⑤係り助詞〕

## 1 はじめに——第1部と第2部とでの表現の相違と文体

『徒然草』はこれまでも様々な観点からの日本語学的研究がなされてきている。『徒然草』の日本語学的研究の課題としては、○中世前期の日本語、○和漢混交文、○和文体と和漢混交文の混在、○擬古文、○中世漢語、○主題（無常観、仏教思想など）と語彙や表現、○係り助詞・係り結び（その文体および個々の文章との関係）、○章段構成（章段と文体の相違、特に序段から第三十二段までの前半部（第1部）と、それ以降の後半部（第2部））との文体的相違などがあげられる。しかし、日本語史の研究では、2000年以降、中世の一資料としては利用されるものの、個別の章段解釈などを別とすれば、一時期より多くはなく、停滞している感があるのは否めない（研究史については、安部（2020. 01）にて触れた）。

研究課題の一つにその中世的文体、あるいは、擬古文的文体の問題があり、いくつかの論文もあって個々の具体的な指摘もなされているが、まだ多くはなく、またその特徴の全体的な把握という点では十分な段階ではないように思われる。その理由はいくつか考えられるが、一つには、中古的な擬古的な要素（意図的な脚色としての）なのか、作者の個性からくる文体なのか、それもやや中古的要素を残す、当時としても古語的な表現を好む作者の好みからおのずと現れているいわばやや古風な表現・文章が混在するということなのか、それとも、中古と同じ語彙を使用する場合でも（「あはれ」「をかし」等）、その使い方や意味合いなど用法の微妙なところが中世的におのずと変質してしまっていて中古的用法とは見えないために「擬古的」だと思えてしまっているだけなのか、これらの諸側面個々の峻別がなかなか容易にできない、という側面もあるように思われる。

執作者（安部）は、連語研究の試みの一つとして、『徒然草』の文末表現および接続表現を取り上げ、そのいわゆる第1部・第2部での意味・用法の相違を比較し、また、同じいわゆる随筆とされるジャンルの中古の作品である『枕草子』の用法とも比較して

みた（安部（2010. 01）および安部（2020. 05）参照）。連語的視点から見ることで、語単独で見た用法、所謂品詞論の単位での語（語彙）をただけでは相違が気づけなかったような特徴の相違——第1部・第2部間の相違、『枕草子』と『徒然草』との相違——を見出しやすいように思われた。（安部）

そこで、本稿でも連語の観点、連語の用法の現れ方に着目し、特に「覚ゆ」と助動詞「き」との連語表現「覚えし」を取り上げ、『徒然草』でのその使われ方を分析してみることにしたい。連語史研究の視点から『徒然草』を調査してみると、動詞「覚ゆ」と過去の助動詞「き」が付属した形式「覚えし」、および、その係り助詞との呼応表現「こそ～覚えしか」の現れ方に特徴があるように見えた。そこで「覚えし」「こそ～覚えしか」をある種の連語とみなし、調査を行ってみた。その用法には、第1部と第2部とで相違が見られた。また、『徒然草』執筆にあたり影響があったとされる『枕草子』との比較も行い、それぞれの用法の特徴を考察することで、これらの用法の時代的变化も確認しつつ、『徒然草』での第1部・第2部の相違を対照的に分析してみることにしたい。

なお、『徒然草』の成立年代は諸説あるが、『徒然草』全段の成立は橘純一（1938）の詳細な考証により元弘元（1331）年頃とされ、それが定説とされてきた。それに対し、西尾実（1962）が三十段あたりで前後の成立を異にするとした二部説を提唱し、さらに安良岡康作（1968）が「徒然草概説」で、全段が一度に執筆されたのではなく、第三十二段までが元応元（1319）年に成立した第1部であり、第三十三段以降は元徳2（1330）年から元弘1（1331）年に成立した第2部であると指摘している。本論では二部説に基づいて考察を行う。

なお、引用例文は『枕草子』『徒然草』ともに原則『旧・日本古典文学大系』に拠り、一部便宜的に表記を変えた場合がある。また現代語訳を付した箇所では『新編日本古典文学全集』の訳を参考にして私に訳を付した。（以下、「覚えし」と「（こそ～）覚えしか」とを併せて呼ぶ場合は《覚エシ》と表記しておくことにする。）

## 2 『徒然草』における「覚えし」「こそ～覚えしか」の偏在

『徒然草』における「覚えし」の用例は、「覚えしか」を含め、11例ある（第十、十一、二十四、六十七、八十二（2例）、八十四、九十八、一百三十四、二百三十一、二百三十二段）。その11例中7例（63.6%）は、係り助詞「こそ」を受けた已然形「覚えしか」の例で、他の4例（36.4%）は終止形「覚えし」の例である（【表1】参照）。『徒然草』では《覚エシ》は、係り助詞との呼応が多いことがわかる。

その出現位置を見ると、11例中の9例（81.8%）が上巻（第百三十六段まで）に偏っている。さらに、終止形「覚えし」は上下巻どちらにも現れているが、「こそ～覚えしか」は上巻のみに現れている。さらに言えば、下巻（第百三十七段以降）では「覚えし」しか使われていないが、下巻の始めの方の段にはなく、下巻でも終わりの方、二百段に入っ

【表1】『徒然草』の「覚えし」「覚えしか」の章段分布

| 章段     | 10   | 11   | 24   | 67   | 82①  | 82② | 84   | 98  | 134  | 231 | 232 |
|--------|------|------|------|------|------|-----|------|-----|------|-----|-----|
| 巻      | 上巻   | 上巻   | 上巻   | 上巻   | 上巻   | 上巻  | 上巻   | 上巻  | 上巻   | 下巻  | 下巻  |
| 覚えしの語形 | 覚えしか | 覚えしか | 覚えしか | 覚えしか | 覚えしか | 覚えし | 覚えしか | 覚えし | 覚えしか | 覚えし | 覚えし |

\* 82段に2例があり、登場順（「覚えしか」「覚えし」）に①②とした。

てからの第二百三十一段と第二百三十二段になって再び現れてきている点は注意される。

安良岡康作（1968）によると、『徒然草』は第三十二段までが元応元（1319）年までに成立し、第三十三段以降は元徳2（1330）年～元弘元（1331）年に成立したとされる。第三十二段までの第1部、第三十三段以降の第2部では文体が変化しているとも指摘されている。第三十二段以前は「覚えしか」のみ、「覚えし」は第三十三段以降にしか現れていないことは、第1部と第2部との文体の相違を投影している可能性がある。その点にも注意を払いながら検討を進めてみたい。次章ではまず「覚えし」と「こそ～覚えしか」それぞれの用法を分析してみることにする。

### 3 『徒然草』の各章段内での出現位置と用法

#### (1) 「覚えし」と「こそ～覚えしか」の各章段内での出現位置

「覚えし」4例、「覚えしか」7例について、各章段内での出現位置に特徴が見られたので、まずそれについて調べてみた。【表2】は、11例が、その章段内のどのような位置に現れているかをまとめたものである。

【表2】『徒然草』「覚えし」「こそ～覚えしか」合計11例の章段内での使用位置

| 章段     | 10        | 11   | 24   | 67       | 82①  | 82②      | 84   | 98  | 134  | 231      | 232 |
|--------|-----------|------|------|----------|------|----------|------|-----|------|----------|-----|
| 巻      | 上巻        | 上巻   | 上巻   | 上巻       | 上巻   | 上巻       | 上巻   | 上巻  | 上巻   | 下巻       | 下巻  |
| 覚えしの語形 | 覚えしか      | 覚えしか | 覚えしか | 覚えしか     | 覚えしか | 覚えし      | 覚えしか | 覚えし | 覚えしか | 覚えし      | 覚えし |
| 位置     | 章末<br>二文目 | 章末   | 一文目  | 章段<br>半ば | 一文目  | 章段<br>半ば | 章末   | 一文目 | 二文目  | 章段<br>半ば | 二文目 |

11例中3例（27.3%）が第1文目、2例（18.2%）が第2文目、3例（27.3%）が章段半ば、1例（9.0%※）が章段最後から2文目、2例（18.2%）は章段最末尾文に現れている。（※正しくは9.1%であるが他の小数点値との関係で切り下げている数値）

特徴的傾向からまとめると、章段の第1文目や第2文目という章段冒頭部での用例が11例中5例（45.4%）、章段半ばの用例が11例中3例（27.3%）、章段最後から2文目や章段最末尾文という章段末尾部での用例が11例中3例（27.3%）であるといえる。

従って、全体として『徒然草』における《覚エシ》の章段中の位置は、章段冒頭、章段半ば、章段末尾の3つのパターンに大別できる。

以下では、まず章段の冒頭や章段末尾の用例を、次に章段半ばの用例を取り上げ、それぞれの特徴について分析する。

## (2) 《覚エシ》の章段冒頭および章段末の用例——章段主題部での使用

まず、章段の冒頭の用例を見ると、第二十四段のように第1文目にあるものが挙げられる。

### ○【第二十四段】(全文引用)

斎王の野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事のかぎりとは覚えしか。  
「経」・「佛」など忌みて、「なかご」、「染紙」などいふなるもをかし。

すべて神の社こそ、すてがたく、なまめかしきものなれや。ものふりたる森のけしきもたゞならぬに、玉垣しわたして、榊木に木綿かけたるなど、いみじからぬかは。

ことにをかしきは、伊勢・賀茂・春日・平野・住吉・三輪・貴布祢・吉田・大原野・松尾・梅宮。

第二十四段は第1文目に「こそ～覚えしか」がある例である。この文では「斎王が野宮にいらっしゃる様子こそ、優美で趣のあることの極みだと思ったことである。」と述べており、作者の認識・判断を示す文に使われていることがわかる。全体は形容詞による評価文が多用された形容詞列挙型で(安部(2020.5))、「やさし・おもしろし・をかし・なまめかし・をかし・いみじ」など、各々の対象への作者の評価が列挙されている章段(形容詞評価文多用の章段)である。ここでの《覚エシ》はその冒頭にあり、形容詞「やさし・おもしろし」を二つも使い、その最大たるもの(「限り」=極み)として、最も強調されている文において使用されている。その点で、全体の主題そのものではないが、冒頭部での主題に準じる事柄に対して使用された表現とも言えよう。

一方、章段末尾部に《覚エシ》がある用例としては、第八十四段が挙げられる。

### ○【第八十四段】(全文引用)

法顯三藏の、天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひ給ける事を聞て、「さばかりの人の、無下にこそ心弱き氣色を、人の國にて見え給けれ」と人の言ひしに、弘融僧都、「優に情ありける三藏かな」と言ひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくく覚えしか。

第八十四段では章段最末尾文に「こそ～覚えしか」がある。この文では「弘融僧都が

『(三蔵法師は) 優しくて情のある高僧であったことよ』と言ったのは、まったく法師のようでもなく、奥ゆかしく思われたことである」と述べている。第二十四段同様、作者の認識を述べる文で「こそ～覚えしか」が使われている。また短い段ではあるが、末尾部において、法顯三蔵が「優に、情あ」る人物であるという弘融僧都の言葉の引用は、「心にくし」と肯定を表現することで作者の三蔵に対する認識を間接的に投影している主題的部分となっている箇所である。

このような部分に《覚エシ》、特に「こそ～覚えしか」が充てられていることがわかる。

### (3) 《覚エシ》の章段半ばの用例

章段半ばに使用される例は、上記の章段の冒頭や末尾の例とはやや異なる傾向があるように一見見える。そこで、ここでは第六十七段を取り上げ、内容の区切りで章段を前半と後半に分けて分析してみる。

#### ○【第六十七段】(全文引用)

##### 【前半部】

賀茂の岩本・橋本は、業平・實方なり。

人の常に言ひまがへ待れば、一年参りたりしに、老たる宮司の過しを呼び止めて、尋侍しに、「實方は、御手洗に影の映りける所と侍れば、『橋本や、なほ水の近ければ』と覚え侍る。吉水和尚、

月をめで花を眺めしいにしへのやさしき人はこゝにありはら  
と詠み給けるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、己らよりは、なかへ御在知な  
どもこそさうらはめ」と、いとうやうやしく言ひたりしこそ、いみじく、覚えしか。

##### 【後半部】

今出川院近衛とて、集どもにあまた入たる人は、若かりける時、常に百首の歌を詠みて、かの二の社の御前の水にて書て手向られけり。誠にやん事なき譽ありて、人の口にある歌多し。作文・詩序など、いみじく書く人なり。

第六十七段では、「こそ～覚えしか」のある文の直後で、内容上二分できる。「こそ～覚えしか」はその前半の部分の文末にある。つまり、この第六十七段の「こそ～覚えしか」は章段全体の半ばにはあるが、その機能は章段末に《覚エシ》がある用例とほぼ同様に、一つの話題のまとめの部分に使用されていると言える。また、その和尚の言葉は、前半部での話題の中心的な部分でもある。

このような傾向は、第八十二段(の2例目の「覚えし」、第二百三十一段(「覚えし」などの《覚エシ》が章段半ばに見られる事例全てに共通して言える。第八十二段は、前半部は不具なるものの具体例で(その前半の冒頭部に「こそ～覚えしか」、前半末尾部

に「『～』と言ひしも、いみじく覚えしなり。」、計2例ある）、後半部は作者の認識である。第二百三十一段は、前半部が別当入道の逸話（その末尾にある「『～』とのたまひたりし、をかしく覚えしと人の語り給ける、いとをかし。）」、後半部は作者の認識が書かれている。どちらの章段においても《覚エシ》の文の直後で章段が前後に分かれているのである。しかも、第六十七段も含め、これら3例とも、直前の誰かの台詞自体に主題的意義があり、かつ、その前後での作者の意見や認識を補強するためにこの表現が利用されていて、ある種のパターン化された形式になっているらしいことも見えてくる。

以上から、章段半ばに《覚エシ》がある3例は、《覚エシ》の文で章段が二分され、《覚エシ》は章段の前半部分の末尾文に使われていると言える。これらは章段半ばの位置ではあるが、その用法は章段末尾の例に準じる機能をもっていたとみなすことができるだろう。

#### (4) 《覚エシ》が使われている文の分析

前節まで見てきたように、『徒然草』における《覚エシ》は作者の認識や判断、さらにまた、主題にも関わる部分で使われる傾向があると考えられる。単なる使用位置だけの問題ではなさそうであるので、章段内容とも照らし合わせて、『徒然草』全体としてはどのような内容に関わる部分で現れているかを、さらに検討していくことにしたい。

【表3】は、①に《覚エシ》が使われている文脈、②に章段中の位置、③に《覚エシ》と考えた（覚えた）主体（誰が「覚えし」と考えたか）、④に章段全体の主題を仮にまとめてみたものである。また、網掛けにした章段番号は「こそ～覚えしか」の例である。

【表3】を見ると、《覚エシ》の対象となっている事象は、11例中10例（90.9%）が、作者の意見を表すために使われている表現であることがわかる（第二百三十一段以外の10例）。《覚エシ》は作者の認識や判断、ないし、それを含む章段の主題を述べる時によく使用されているのである。

次は第八十二段の例であるが、《覚エシ》が使われている章段では、章段の主題やそれに関する説話的話題を取り上げた部分で《覚エシ》が現れている傾向があることが指摘できる。

#### ○【第八十二段】（全文引用）

「羅の表紙は、とく損ずるがわびしき」と人のいひしに、頓阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は貝落て後こそいみじけれ」と申侍しこそ、心まさりて覚えしか。

一部とある草子などの、同じやうにもあらぬを見にくしといへど、弘融僧都が、「物を必一具に調べんとするは、つたなきもののする事なり。不具なるこそよけれ」と言ひしも、いみじく覚えしなり。

【表3】《覚エシ》の対象となっている内容・事象と章段の主題

| 章段  | ①《覚エシ》が使われている文脈   | ②章段中の位置 | ③誰の意見か         | ④章段の主題                         |
|-----|---|---------|----------------|--------------------------------|
| 10  | 「鳥の群れゐて池の蛙をとりければ、御覧じかなしませ給てなん」と人の語りしこそ、さてはいみじくこそと <u>覚えしか</u> 。   | 文末二文目   | 筆者             | 住居が住む人の有様を反映する/徳大寺への批判は保留にすべき  |
| 11  | かなたの庭に大きな柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりなきびしく圍ひたりしこそ、少しことさめて、この木なからましかばと <u>覚えしか</u> 。                                      | 文末      | 筆者             | 自然な家の良さ                        |
| 24  | 斎王の野宮におはしますありさまこそ、やさしく、面白き事のかぎりとは <u>覚えしか</u> 。   | 一文目     | 筆者             | 神社の優雅さ                         |
| 67  | 吉水和尚、「月をめで花を眺めしにしへのやさしき人はこゝにありはらと詠み給けるは、岩本の社とこそ承り置き侍れど、己らよりは、なかへ御在知などもこそさうらはめ」と、いとうやへしく言ひたりしこそ、いみじく <u>覚えしか</u> 。 | 章段半ば    | 筆者             | 上賀茂神社の2末社の祭神/2社の水で墨をする今出川院近衛の話 |
| 82① | 頼阿が、「羅は上下はづれ、蝶鈿の軸は貝落て後こそいみじけれ」と申侍しこそ、心まさりて <u>覚えしか</u> 。  | 第一文目    | 筆者             | 不具なるもののよさ                      |
| 82② | 弘融僧都が、「物を必一具に調へんとするは、つたなきもののする事なり。不具なるこそよけれ」と言ひしも、いみじく <u>覚えし</u> なり。   | 章段半ば    | 筆者             | 同上                             |
| 84  | 弘融僧都、「優に情ありける三藏かな」と言ひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくゝ <u>覚えしか</u> 。  | 章末      | 筆者             | 弘融僧都の奥ゆかしさ                     |
| 98  | 尊きひじりの云置ける事を書付て、一言芳談とかや名づけたる草子を見侍しに、心にあひて <u>覚えし</u> 事ども。   | 一文目     | 筆者             | 聖人らの『一言芳談』でなるほどと思われたこと         |
| 134 | 御堂のつとめばかりにあひて、籠居たりと聞侍しこそ、ありがたく <u>覚えしか</u> 。  | 二文目     | 筆者             | 自己省察こそが基本であること                 |
| 231 | 「切りぬべき人なくは、給べ。切らん」と言ひたらんは、なほよかりなん。何條、百日の鯉を切らんぞ」とのたまひたりし、をかしく <u>覚えし</u> 。   | 章段半ば    | ある人<br>(筆者も共感) | 素直で穏当なのがよい                     |
| 232 | ある人の子の、見ざまなど悪しからぬが、父の前にて、人と物いふとて、史書の文をひきたりし、賢しくはきこえしかども、尊者の前にては、さらずともと <u>覚えし</u> なり。                             | 二文目     | 筆者             | 若い人はふとしたことで良くも悪くも見える           |

(※④の欄で章段の主題が二つある場合は / で区切った)

「すべて、何も皆、ことのとゝのほりたるはあしき事なり。しのこしたるを、さて打置たるは、面白、生き延ぶるわざなり。内裏造らるゝにも、必ず、作り果てぬ所を残す事なり」と、或人申侍しなり。

先賢のつくれる内外の文にも、章段の缺けたる事のみこそ侍れ。

第八十二段の主題は「不具なるものの良さ」（不揃いなものの良さ）である。この章段では《覚エシ》が第1文と第3文で使われている。第1文では、頓阿が「薄物の表紙が、上下の部分がほつれ、螺鈿をちりばめた巻物の軸は、貝が落ちた後こそが素晴らしいのだ」と述べたことを、見上げたものだと思われた、という形で使われている。第2文目では、弘融僧都が「（前略）不揃いであるのこそが良いのだ」と言ったのも、素晴らしいと思われた、という形で使われている。どちらも、章段全体の主題である「不具なるものの良さ」を扱った内容であり、作者の意見を述べる場合に《覚エシ》が使われている。【表3】に示したように、どれも章段の主題と関連した内容になっているのである。

そのような中で、唯一作者の認識や判断とは見えない第二百三十一段を次に検討してみたい。

### ○【第二百三十一段】

（前略）或人、北山太政入道殿にかたり申されたりければ、「かやうの事、己はよにうるさく覚ゆるなり。『切りぬべき人なくは、給べ。切らん』と言ひたらんは、なほよかりなん。何條、百日の鯉を切らんぞ」とのたまひたりし、をかしく覚えしと人の語り給ける、いとをかし。

大方、振舞ひて興あるよりも、興なくてやすらかなるが、まさりたる事なり。客人の饗應なども、ついでをかしきやうにとりなしたるも、誠によけれども、たゞその事となくてとり出たる、いとよし。

人に物を取らせたるも、ついでなくて、「これを奉らん」と云たる、まことの志なり。惜む由して乞はれんと思ひ、勝負の負わざにことつけなどしたる、むつかし。

【現代語訳】（北山太政入道殿がある人に）「（素晴らしい鯉を）切ることができる人がいなければ（私に）下さいませ、切りましようと言ったならば、一層良かったであろう。何で百日の鯉を切ろうと言うのか」と仰せられたのは、面白いと思われたと、ある人がお話なさったのはたいそう興味深い。

第二百三十一段は、ある人が北山太政入道殿に意見したことを、また別の人が面白いと思ったと作者に話している。ここではある人の意見をまた別の人が「をかしく覚えし」と思ったという形で使われているが、作者もそのことを「いとをかし」と述べている。そのため、「をかしく覚えし」は作者の意見を書いている部分ではないが、作者も共感しているのであるから、ここは作者の認識・判断に準じる内容、と見なすことができる。その点で他の箇所と同様とみておくことができる。

この第二百三十一段は少しわかりにくいかもしれないが、章段の主題と《覚エシ》が使われている文の「をかし」と、作者の認識は同じである（二つ目の「をかし」は表面的にはその人が「語り給ける」行為自体が対象であろうが、「をかしく覚えし」と同じ



「をかし」であり、言った内容自体に同調していることが読み取れる)。

この第二百三十一段の前半部分では、比類のない料理人である別当入道(藤原基氏)が、人々が入道の鯉切りを見たいと言いつけたいのを見て、自分から言い出して鯉切りをしたことがあった。そのことがたいそうその場に相応しいものであったと、北山太政入道に話す人がいたが、入道は「率直で自然な言い方をすればいい良かったであろう。なぜ『百日の鯉を切ろう』と(いう大げさな言い方で)言うのか」と述べている。後半部分は、趣向を弄するより、素直で穏当なのが良いという作者の意見を述べている。

以上のように、《覚エシ》11例全体は作者の認識や意見、判断を述べる表現において使われている。また《覚エシ》が使われている箇所での《覚エシ》の対象が示す内容は、章段の主題かそれと関わる重要な事象であることがわかる。つまり、《覚エシ》は作者の認識・判断や主題に関わる内容を述べる際の表現形式になっていると考えられる。

ところで、『徒然草』の主題は、章段冒頭部の第1文や第2文、あるいは、章段最終末尾文や章段最後から2、3文目などの章段末尾部に述べられることが多い(安部(2020.1)も参照)。そのような視点から見ると、《覚エシ》11例のうち、章段冒頭部に5例、章段末尾部に3例、つまり《覚エシ》11例中8例(72.7%)が章段の冒頭部か末尾部にあることは、《覚エシ》が作者の意見や認識あるいは章段の主題を述べる箇所(位置)でよく使われる傾向があることを裏付けよう(章段の中間部の事例もそれに準じる用法であった)。

#### (5) 《覚エシ》が使われている文の構造

《覚エシ》が用いられる表現形式にも類型が見られる。次に、《覚エシ》が使われる文の形式的構造について、改めて見ていくことにしたい。

【表4】は《覚エシ》のある文の構造を分析的に示したものである。①は係り助詞「こそ」の有無、②は《覚エシ》の前にある語(形容詞や評価的表現)の対象(評価の対象)、③は《覚エシ》の直接の対象、④は《覚エシ》の語形、⑤は《覚エシ》の前にある表現の品詞ないし語句の分類である。また、②～④での語句は、左から順に読んでいくと、原文のままになるように示してある。

【表4】を見ると、まず全て「評価の対象」、「形容詞・(語り手の)評価表現」、《覚エシ》という順の文の構造になっていることがわかる。つまり、以下のような構造になっているといえる。

- ・「評価の対象」+ の +「形容詞・評価表現」+「覚えし」  
(章段 = 82 ②、98、231、232)
- ・「評価の対象」+「こそ」+「形容詞・評価表現」+「覚えしか」  
(章段 = 10、11、24、67、82 ①、84、134)

【表4】《覚エシ》（「覚えし」と「覚えしか」）の用例の文の構造とその内容

| 章段  | ①「こそ」の有無 | ②《覚エシ》の前にある語の対象  | ③《覚エシ》の直接の対象                 | ④《覚エシ》の語形 | ⑤《覚エシ》の前にある表現 |
|-----|----------|--|------------------------------|-----------|---------------|
| 10  | あり       | 「鳥の群れあて池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給てなん」と人の語りしこそ、                          | いみじくこそ <u>と</u>              | 覚えしか      | 形容詞           |
| 11  | あり       | 柑子の木の、枝もたわゝになりたるが、まはりをきびしく圍ひたりしこそ、                               | この木なからまし <u>か</u> ば <u>と</u> | 覚えしか      | 評価表現          |
| 24  | あり       | 斎王の野宮におはしますありさまこそ、   | やさしく、面白きことのかざり <u>とは</u>     | 覚えしか      | 評価表現          |
| 67  | あり       | 吉水和尚、「(中略)」と、いとうや++しく言ひたりしこそ、                                    | いみじく                         | 覚えしか      | 形容詞           |
| 82① | あり       | 頼阿が、「羅は上下はづれ、螺鈿の軸は貝落て後こそいみじけれ」と申侍しこそ                             | 心まさりて                        | おぼえしか     | 形容詞           |
| 82② | なし       | 不具なるこそよけれ」と言ひしも  | いみじく                         | おぼえし      | 形容詞           |
| 84  | あり       | 弘融僧都、「優に情ありける三藏かな」と言ひたりしこそ、                                      | 法師のやうにもあらず、心にくゝ              | おぼえしか     | 形容詞           |
| 98  | なし       | 尊きひじりの云置ける事を書けて、一言芳談とかや名づけたる草子を見侍しに、                             | 心にあひて                        | 覚えし       | 評価表現          |
| 134 | あり       | 御堂のつとめばかりにあひて、籠居たりと聞侍しこそ、  | ありがたく                        | おぼえしか     | 形容詞           |
| 231 | なし       | 「切りぬべき人なくは、給べ。切らん」と言ひたらんは、なほよかりなん。何條、百日の鯉を切らんぞ」とのたまひたりし、         | をかしく                         | 覚えし       | 形容詞           |
| 232 | なし       | ある人の子の、見ざまなど悪しからぬが、父の前にて、人と物いふとて、史書の文をひきたりし、賢しくはきこえしかども、尊者の前にては、 | さらずとも <u>と</u>               | おぼえし      | 評価表現          |

(※特定の品詞に当てはまらず、作者の評価を述べている表現は全て「評価表現」とした)

係り助詞「こそ」の有無による活用形の違いはあるが、「評価の対象」「形容詞・評価表現」「覚エシ」という順は共通である。よって、《覚エシ》が用いられている文は、全て「評価の対象」に対して「形容詞や評価表現」によって、作者の対象への評価や認識、判断を述べるための構造になっていると言えよう。

また、【表4】を見ると、『徒然草』における《覚エシ》の直前にある表現は、形容詞、または評価表現であるという特徴がある。このように、『徒然草』における《覚エシ》は、〈「評価の対象」(こそ)「形容詞・評価表現」「覚えし(か)」〉という文の形式で使われている。また、《覚エシ》の直前にある語句は形容詞、または(語り手の)評価表現である、ということになる。きわめて様式化された構造の表現の一部として《覚エシ》が用いられていることがわかる。

さらに興味深い点は、《覚エシ》の直前が「と」「とは」を含む)で受ける形式の4例のうち(第十、十一、二十四、二百三十二段)、3例(第二百三十二段以外の3段)は、

すべて第1部に偏っているが、それが、『枕草子』でも、同じく「と」（「とこそ」を含む）で受ける例が11例中9例も占めているという点である。即ち、「～と＋《覚エシ》」という表現は、『枕草子』の表現に近似するものであり、それは『徒然草』では第1部に集中（75%）して用いられていることになる。特に、その中でも『枕草子』に4例現れている連語表現「～こそ～と覚えしか」という形式は、『徒然草』では第1部にしか現れていない。この「～と」の有無の点も、『徒然草』の第1部の表現が『枕草子』の影響をかなり受けていることを示していると解釈される。

補足であるが、第十段では形容詞の後に係り結びとは関わらない「こそ」が用いられている事例があるので説明しておく。該当の「こそ」は斜字で示した。

#### ○【第十段】

（前略）この殿の御心、さばかりにこそ」とて、そののちは参らざりけると聞侍るに、綾小路宮のおはします小坂殿の棟に、いつぞや繩をひかれたりしかば、かの例思ひ出でられ侍しに、誠や、「烏の群れゐて池の蛙をとりければ、御覽じかなしませ給てなん」と人の語りしこそ、『さてはいみじくこそ』と覚えしか。徳大寺にもいかなる故か侍りけん。

ここでは、「人の語りしこそ」と「覚えしか」で既に係り結びが成立しているが、さらに「いみじくこそ」と再び「こそ」が挿入されているように見える。これは、心内話部分の強調のために追加された「こそ」と見なすことができるであろう。

#### 4 『枕草子』における《覚エシ》の特徴——『徒然草』との比較

『徒然草』と同じ随筆として扱われる中古の『枕草子』にも《覚エシ》の用例がある。『徒然草』との比較のため検討してみることにしたい。

『枕草子』における「覚えし」の用例は4例、「覚えしか」の用例は7例であるが、その用法は『徒然草』とは異なるものがあつた。『徒然草』において「こそ～覚えしか」が使われる場合、「こそ」と「覚えしか」の間に形容詞や評価表現があつた。『枕草子』でも、『徒然草』と同じ用法は4例あるが、それ以外に、「こそ覚えしか」のように、「こそ」と「覚えしか」の間に何の語句もおかれない用法が3例見られる。

【表5】は、【表4】同様に『枕草子』の用例を分析したものであるが、①に「こそ」の有無、②に《覚エシ》の前にある語の対象、③に《覚エシ》の前にある直接の対象、④《覚エシ》の語形、⑤に《覚エシ》の前にある語の分析を示した。【表5】では「こそ」の有無の欄に、「こそ」が「覚えしか」と直接接続している用法にはその旨を記した。

【表5】を見ると、《覚エシ》の前にある語が形容詞である例が11例中3例（27.3%）、

【表5】『枕草子』における《覚エシ》の用例（11例）

| 章段    | 章段の冒頭                               | ①「こそ」の有無           | ②《覚エシ》の<br>前にある語の対象   | ③《覚エシ》の<br>前にある表現                           | ④《覚エシ》<br>の語形 | ⑤《覚エシ》の<br>前にある語 |
|-------|-------------------------------------|--------------------|---|---|---------------|------------------|
| 82 ①  | 頭中將のすず<br>ろなるそら言<br>を聞きて            | —                  | げにあまたして、さる<br>ことあらんとも知ら<br>で、ねたうもあるべか<br>りけるかなと、これに<br>なん、                  | 胸つぶれて                                       | 覚えし           | 評価表現             |
| 82 ②  | 同上                                  | ○                  | をのこどもみな、扇に<br>書きつけてなむ持た<br>る、など仰せらるるに<br>こそ、                                | あさましく、何の<br>いはせけるにかと                        | おぼえしか         | 動詞               |
| 93    | 無名といふ琵琶                             | ○<br>(覚えしかに<br>接続) | 「ただいとはかなく、<br>名もなし」とのたまは<br>せたるは、   | なほいとめでたし<br>とこそ                             | おぼえしか         | 形容詞              |
| 128   | 八幡の行幸の<br>かへらせ給ふ<br>に               | ○<br>(覚えしかに<br>接続) | うちのわたらせ給ふ<br>を、見たてまつらせ給<br>ふらん御心地、思ひや<br>りまゐらすは、                            | 飛び立ちぬべくこ<br>そ                               | 覚えしか          | 動詞               |
| 158   | うらやましげ<br>なるもの                      | ○                  | 道にあひたる人にうち<br>いひて下りいきしこそ、   | ただなる所には目<br>にもとまるまじきに、<br>これが身にただ今な<br>らばやと | おぼえしか         | 評価表現             |
| 161 ① | 故殿の御服の<br>ころ                        | —                  | 月ごろいつしかとおも<br>ほえたりしに、   | わが心ながらすき<br>ずきしと                            | おぼえし          | 形容詞              |
| 161 ② | 同上                                  | ○                  | 「三十九なりける年こ<br>そ、さはいましめけ<br>れ」とて、宣方は「い<br>みじういはれにたり」<br>といふめるは」と仰せ<br>られしこそ、 | ものぐるほしかり<br>ける君とこそ                          | おぼえしか         | 形容語              |
| 184   | 宮にはじめて<br>まゐりたるこ<br>ろ               | —                  | 我も「なにがしが、と<br>あること」など、殿上<br>人のうへなど申し給ふ<br>を聞くは、                             | なほ變化の者、天<br>人などの下りきた<br>るにやと                | おぼえし          | 動詞               |
| 228   | 九月二十日あ<br>まりのほど                     | ○                  | 人の臥したりしどもが<br>衣の上に、しろうてう<br>つりなどしたりしこそ、                                     | いみじうあはれと                                    | おぼえしか         | 形容動詞             |
| 292 ① | 成 信 の 中 將<br>は、入道兵部<br>卿の宮の御子<br>にて | ○<br>(覚えしかに<br>接続) | 伊豫の守兼資が女忘れ<br>て、親の伊豫へ率てく<br>だりしほど、  | いかにあはれなり<br>けんとこそ                           | おぼえしか         | 形容動詞             |
| 292 ② | 同上                                  | —                  | 過ぎにしことの憂かり<br>しも、うれしかりしも、   | をかしと  | おぼえし          | 形容詞              |

(章段番号は旧・日本古典文学大系本の『枕草子』により、④の欄の語形は、原文のまま記した)

評価表現である例が11例中2例(18.2%)、動詞である例が11例中3例(27.3%)、形容動詞である例が11例中2例(18.2%)、名詞である例が11例中1例(9.0%\*)となっている。(\*1/11は9.09…%であるが、他の小数点値との関係でこれを切り下げた。)

つまり、『徒然草』の表現は《覚エシ》の前は形容詞が評価表現のみであった(【表3】)のに対し、『枕草子』は形容詞、評価表現、動詞、形容詞、名詞などにわたり多様な表現が見られる。さらに、形容詞と動詞が各々11例中3例(27.3%)ずつ(計6例)、評価表現と形容動詞が11例中各々2例(18.2%)ずつ(計4例)となっており、形容詞と動詞が一番多く、次に評価表現と形容動詞が多くみられるという傾向があることがわかった。

例えば、下に挙げた『枕草子』の「はしたなきもの」の章段では、「こそ～覚えしか」の前に「飛び立ち+ぬ+べく」という動詞と助動詞による表現になっている。

- 八幡の行幸のかへらせ給ふに、女院の御棧敷のあなたに御輿とどめて、御消息申させ給ふ、世に知らずいみじきに、まことにこぼるばかり、化粧じたる顔みなあらはれて、いかに見ぐるしからん。

宣旨の使にて、齊信の宰相の中將の、御棧敷へまゐり給ひしこそ、いとをかしう見えしか。

ただ隨身四人、いみじう装束きたる、馬副ほそく白うしたてたるばかりして、二條の大路の廣くきよげなるに、めでたき馬をうちはやめて、いそぎまゐりて、すこし遠くより下りて、そばの御簾の前にさぶらひ給ひしなど、をかし。

御返しうけたまはりて、御輿のもとにて奏し給ふほど、いふもおろかなり。

さて、うちのわたらせ給ふを、見たてまつらせ給ふらん御心地、思ひやりまゐらすは、飛び立ちぬべくこそ覚えしか。それには長泣きをしてわらはるぞかし。

よろしき際の人だに、なほ子のよきはいとめでたきものを、かくだに思ひまゐらすもかしこしや。

——『枕草子』「はしたなきもの」

このように、『枕草子』では動詞が使われることがあるが、『徒然草』では動詞は使われなくなっていた。

また、『枕草子』における「こそ～覚えしか」の用例は11例中7例(63.6%)あるが、そのうち3例(27.3%)では「こそ」と「覚えしか」の間に語句はなく、「こそ覚えしか」と繋がった形で使われている。そこでは、動詞、形容動詞、形容詞は「こそ」の前に置かれている。『徒然草』の「評価の対象」に「こそ」が付属されているといった用法とは明らかに異なっている。以下は、「無名といふ琵琶」の章段の例である。

○無名といふ琵琶の御琴を、上の持てわたらせ給へる、みなどしてかき鳴らしなどする、といへば、弾くにはあらで、緒などを手まさぐりにして、「これが名よ、いかに」とかきこえさするに、「ただいとはかなく、名もなし」とのたまはせたるは、なほいとめでたしとこそおぼえしか。

——『枕草子』『無名といふ琵琶』

この用例では、「こそおぼえしか」の前に「なほいとめでたし(と)」という形容詞が前接している。他の2例を見ると、「はしたなきもの」の章段では「こそおぼえしか」の前に「ものぐるほしかりける君(と)」という名詞が、「成信の中将は、入道兵部卿の宮の御子にて」の章段では「いかにあはれなり(けんと)」という形容動詞が前接している。

このように、用例数は少ないものの、「こそおぼえしか」の形で使われている《覚エシ》の前に接続する語には、形容詞、形容動詞、名詞はあるが、評価表現と動詞は見られないことになる。

以上、『枕草子』における《覚エシ》の用例では、その対象は動詞、形容動詞、形容詞、名詞、その他の評価表現という5種類の表現で表わされ多様であった。そのうちわけは動詞と形容詞が11例中3例(27.3%)ずつ、形容動詞とその他の評価表現が11例中例2例(18.2%)ずつあり、動詞と形容詞が一番多く、次に形容動詞とその他の評価表現がみられるという傾向があることになる。

また、「こそおぼえしか」という、「こそ」と「覚えしか」とが直接接続した事例が3例(27.3%)あるが、「こそおぼえしか」の前に接続する表現は形容動詞、形容詞、名詞の3種類(各1例)が見られ、評価表現と動詞は見られなかった。

## 5 《覚エシ》のまとめ

『徒然草』における《覚エシ》を調査したところ、「覚えし」と「こそ～覚えしか」の2種類があった。さらに「覚えし」と「こそ～(と)覚えしか」の文の構造には、以下のような文型パターンが見られた。

- ①「評価の対象」+ ○ +「形容語・評価表現」+「覚えし」
- ②「評価の対象」+「こそ」+「形容語・評価表現」+「覚えしか」
- ③「評価の対象」+「こそ」+「形容語・評価表現」+「と」+「覚えしか」(第1部)

なぜ、どちらもほぼ同じ表現であるのに、「こそ」の有無の違いがあるのだろうか。また、その「こそ」と呼応するのはなぜ第1部に特に集中して見られるのだろうか。解釈の一つの可能性は第1部・第2部の文体の相違であろう。「こそ」に限らず係り結び全体は中世以降徐々に衰退していく(「こそ」は比較の後まで結びの機能を持って残っているがそれでも係り結び衰退という流れにあった)。第1部は中古の和文との近似性もあり擬古的性格がより強い傾向があるように見える。そのような第1部の特質が、こ

の「覚えし」においても、第1部での「こそ〜と覚えしか」用法の偏在となっているのではないかとされる。類似する現象として、『徒然草』での「あはれ」の使用における「係り助詞（こそ、ぞ）+あはれ」の第1部偏在が指摘できる（安部・峰尾（2020.5））。

【表6】は『徒然草』におけるいわゆる形容動詞「あはれ」31例およびそのうちの所謂形容動詞「あはれなり」22例の出現する章段と係り助詞（こそ・ぞ）との呼応する事例の分布である。「あはれなり」（○印）22例中、係り助詞との直接的呼応9例の内8例は第1部にある。また、「あはれなり」が直接に結びを受けてはいないが直後の表現が係り助詞を受けることで間接的に係り結び表現の中で使用されている2例（⑥⑪）と、直接呼応の9例とを合すると22例中11例（50.0%、表6中のグレー箇所）を占める。その「あはれ」と係り助詞とが関わる11例中10例（91.0%）は第1部に偏って現れている（表6中の第1部のグレー箇所）。この係り助詞と呼応する「あはれなり」の偏在は、

【表6】『徒然草』の「あはれ」の章段分布と係り助詞（安部・峰尾（2020.5））

| 連番 | ①  | ②  | ③  | ④  | ⑤  | ⑥                         | ⑦  | ⑧             | ⑨  |
|----|----|----|----|----|----|---------------------------|----|---------------|----|
| 章段 | 11 | 13 | 13 | 14 | 14 | 14                        | 19 | 19            | 19 |
| 形動 | ○  | ○  | ○  | ○  |    | ○                         | ○  |               | ○  |
| 係助 |    |    |    |    |    | （こそ～あはれなる事は <u>多</u> かめれ） | こそ | （こそ～あはれも～まされ） |    |

| 連番 | ⑩  | ⑪               | ⑫          | ⑬  | ⑭  | ⑮  | ⑯          | ⑰  | ⑱  |
|----|----|-----------------|------------|----|----|----|------------|----|----|
| 章段 | 19 | 19              | 19         | 19 | 21 | 21 | 21         | 25 | 25 |
| 形動 | ○  | ○               | ○          | ○  | ○  | ○  | ○          | ○  | ○  |
| 係助 | ぞ  | （ぞ、あはれにやんごとなき。） | こそ～あはれなりしか | こそ | こそ |    | こそ～あはれなりしか | こそ | ぞ  |

| 連番 | ⑲  | ⑳  | ㉑  | ㉒  | ㉓  | ㉔  | ㉕  | ㉖   | ㉗   |
|----|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 章段 | 26 | 28 | 29 | 30 | 30 | 32 | 44 | 125 | 137 |
| 形動 |    | ○  | ○  |    |    | ○  |    |     | ○   |
| 係助 |    |    |    |    |    |    |    |     |     |

| 連番 | ㉘   | ㉙   | ㉚                | ㉛                              |
|----|-----|-----|------------------|--------------------------------|
| 章段 | 137 | 137 | 142              | 240                            |
| 形動 | ○   | ○   |                  |                                |
| 係助 |     | こそ  | （こそ萬のあはれは思ひ知らるれ） | （こそ淺からず哀と思ふふしへの、忘れがたきことも多からめ。） |

「（こそ）」は「あはれ」「あはれなり」の後の別の語が係り助詞を受けている例。

検討の結果、中古の文体の影響を受けた擬古の用法が第1部に偏ったものであると解釈された（安部・峰尾（2020.5））。係り助詞と呼応する表現が第1部や上巻に偏在するという《覚エシ》のパターンは、仮にそれと同様の現象であるならば、同じように中古和文への擬古的な近似の用法が投影されたものである可能性がある。

2節の【表1】で『徒然草』は第三十二段までの第1部、第三十三段以降の第2部に分けられ、単独での「覚えし」は第三十二段までの段には見られず、第三十三段以降にのみ現れていた。さらに、『徒然草』において「覚えし」と「こそ～（と）覚えしか」という文体が見られるが、両者は係り助詞「こそ」による活用形の違い以外に、大きな相違がない。その背景には、鎌倉時代以降係り助詞が衰退していったことが関わっているものと考えられよう。

【表7】『徒然草』の「～こそ～と覚えしか」の分布

| 章段     | 10        | 11        | 24        | 67   | 82①  | 82② | 84   | 98  | 134  | 231 | 232   |
|--------|-----------|-----------|-----------|------|------|-----|------|-----|------|-----|-------|
| 巻      | 上巻        | 上巻        | 上巻        | 上巻   | 上巻   | 上巻  | 上巻   | 上巻  | 上巻   | 下巻  | 下巻    |
| 覚えしの語形 | ～こそ～と覚えしか | ～こそ～と覚えしか | ～こそ～と覚えしか | 覚えしか | 覚えしか | 覚えし | 覚えしか | 覚えし | 覚えしか | 覚えし | ～と覚えし |

『徒然草』における《覚エシ》の用例から、①作者の認識を表す部分で使われる表現であること、②形容詞・評価表現に接続するという特徴があることがわかった。また、「こそ～と覚えしか」のみが使われる第1部と、「こそ～覚えしか」および係り助詞との呼応がない例も現れる第2部という相違があり、係り助詞との共起は特に上巻に偏っていた（【表7】参照）。係り結びのある表現と擬古の文体とが関連していることが指摘できよう。特に、『徒然草』の第1部の表現（「～こそ～と覚えしか」）には、『枕草子』の表現の影響が強く見てとれた。

## 6 おわりに——「係り助詞～あはれ」の用法との類似

以上、『徒然草』における動詞《覚エシ》の連語的用法に着目して、特に第1部・第2部、上巻・下巻における「覚えし」と「こそ～（と）覚えしか」の3種類の現れ方を比較してみた。このように3種類の表現が使い分けられているのは、『徒然草』の文体が第1部と第2部で大きく異なっているためであると考えられる。鎌倉時代には衰退し始めている係り助詞とあえて呼応させて表現している部分には、作者の意図的文体が現れているように思われる。係り助詞で呼応させた表現を認識・主題に関わる重要な部分に使用し、やや古めかして強調しているところには、ある種の意図的擬古的作為を読み取ることもできるように思われる。それゆえ「覚えし」と「こそ～（と）覚えしか」という3種類の表現の差異は、単なる文体の相違だけではなく、擬古文的表現の作為を読み取ることができるように思われる。



係り助詞と呼応した『枕草子』とも類似した表現が、第1部に偏るという現象は、「あはれ」の用法にも確認できる（安部・峰尾（2020.3））。その点とも合わせて考察すると、『徒然草』における係り助詞と呼応と擬古文体の技法の一傾向が見えてくるように思われる。他の文体差の傾向とも総合した全体的考察は、今後の課題としておきたい。

【参考文献】（以下は本稿で直接関わるもののみにした。『徒然草』の参考文献は安部（2020.3）に詳しいので参照されたい。）

橋純一（1938）「徒然草の執筆された年代」『正註つれづれ草通釈』瑞穂書院

西尾実（1962）『徒然草』「解説」（日本古典文学大系30）岩波書店

安良岡康作（1968）『徒然草全注釈』下巻「徒然草概説」角川書店

渡辺実校注（1991）『枕草子』（新日本古典文学大系25）岩波書店

松尾聰・永井和子校注（1997）『枕草子』（新編日本古典文学全集18）小学館

安部清哉（2020.1）「連語から見た『徒然草』——連語型文末機能語と文体——」「シリーズ〈日本語の語彙3〉中世」朝倉書店

安部清哉（2020.3）「『徒然草』の章段内容と分類」『学習院大学文学部研究年報』66

安部清哉・峰尾みやび（2020.3）「『徒然草』における「あはれ」の現れ方——第1部・第2部の文体と擬古的側面——」『学習院大学国語国文学』63

安部清哉・川澄香奈（2020）「『徒然草』の連語『覚えし』と文体」『学習院大学日本語日本文学』16（本稿）

安部清哉（2020.5予定）「連語から見た『徒然草』第1部・第2部——接続機能表現のプレ近代化と文体——」『論究日本近代語1』勉強出版

安部清哉・川口結（2020.5予定）「『徒然草』の連語『さも』の用法」『学習院大学教職課程研究年報』6

【付記1】 本稿は、『徒然草』の連語に関する安部清哉（2020.1）・同（2020.5予定）の拙論と関連する。先行研究史や本主題に関しても記載してある。併せてご参照いただければ幸いである。

【付記2】 本稿は、2019年度学習院大学大学院の日本語学演習（安部清哉）でのテーマと指導に沿ったものである。川澄が基本的初期調査を行い、発表と指導を経て全体を安部がまとめ直したものである。

【付記3】 本稿は、安部清哉の次の研究費による研究成果の一部である。日本学術振興会科学研究費2017－2019年度基盤研究C（基金）、課題番号：17K02785、代表：安部「古典日本語の連語構成・詞辞複合表現形式の通時的基礎研究」

（あべ・せいや 学習院大学文学部日本語日本文学科教授）

（かわすみ・かな 博士前期課程）